ゴーリキィに関する覚え書

＜コロレンコとの交友をめぐって　その4＞

松本忠司

1. 「大学」時代
2. 放浪と模索の時代
3. 作家的出発の時代
4. 新聞記者時代
   1) 1895年前半
   2) 1895年後半以降
5. アカデミヤ事件（以上既に掲載[1]）
6. 大革命期
7. 晩年

6

アカデミヤ事件のちようど1年前，1901年2月にペテルブルグを訪れたゴーリキィは，ここで2年ぶりにコロレンコと懇談する機会をもった。

コロレンコはたずねた，「どうなんです，あなたはマルキシストになったのですか？」ゴーリキィが「それに近い」と答えると，彼はいう，『私にはそれが判らない。理想主義のない社会主義は私には理解できない！　物質的利害の一般性の意識の上に倫理を打ち建てられようとは考えられない，しかもわれわれは倫理なしにはやっていけないのです。」20世紀初頭，ようやく高揚しつつあった労働者農民の大衆的解放運動にたいしてコロレンコは同情的態度をもち，その積極的擁護者としてしばしば法廷に出版に論陣を展開していた。しかしまたコロレンコは，この運動の理論的指標を保持すべきはずの

(1) 小樽商大人文研究第20輯，24輯および26輯。

マルキシスト・グループのなかに，とりわけ首都のその出版界のなかに，偏狭な派閥抗争に明け暮れ，マルキシストを自称するがその革命的言辞とはうらはらな脊徳的知識人の群が寄生していることを，彼らの影響のもとにある知識青年層の間に騒擾への没倫理的嗜好と頽廃の気分が瀰満しつつあることを深刻に憂慮していた。やがて到来するであろう嵐の告知は人々の心のなかに黎明への期待をよび起こすと同時に，明日という日の明確な展望をまだ示さないところから不安と危懼と動揺とをかもし出す。「輝やかしい未来」を待ちわびる焦燥は人々をしてしばしば「今日よりよく生きる」任務を忘却せしめようとする。「苦しい時代です！何か奇妙な，人々を変えてしまうものが生成している。青年の気持は私にはよく判らないが，彼らの間に虚無主義が発生しているように思える。なにか出世主義者＝社会主義者のようなものが現われているように思える。専制がロシヤを破滅させかけている，それなのに替るべき力は――見えない！」――コロレンコはこう嘆息した。(1)

コロレンコの憂慮に強く共鳴するものを感じながら，しかしゴーリキィは彼とはちがった，彼よりいっそう困難な道を歩もうとしていた。ロシヤ生活の全面的刷新を求める運動をゴーリキィは観察者，もしくは同情者の眼で眺めることはできなかった。彼は運動そのものの内部において革命の論理と人間の倫理の完全な結合を探り求めようとしていた。1901年に彼はマルキシストに「近かった」，そして1904年にはマルキシストの組織に，ロシヤ社会民主労働党に入党した。(2)

すでに触れたように，90年代なかばのサマーラ時代にゴーリキィとコロレ

---

(1) М. Горький. Литературные портреты. М. 1959. с. 254～257.

(2) ゴーリキィの入党の時期についての正確なデータはない。1909年，«Утро России»にゴーリキィがボリシェヴィキーから除名されたこと，およびかつて彼の入党を知ってチェーホフが心を痛めたという内容の記事が載ったとき，ゴーリキィは除名の噂を否定するとともに，「Ан. Пав.〔チェーホフ〕は私の入党について知るはずがなかった，これは彼が亡くなって1年後のことであった。」(С. с., т. 29. с. 100) と書いている。しかし，おそくとも1904年なかばまでには入党していたと推測させる事実もある。彼は党の地方組織とは90年代末，中央組織とは1903年から直接的な接触をもっていた。

ンコの間に文学上の原則に関する見解の相違が片鱗をのぞかせたが[1]，1904年にはいっそう明瞭な相違が示されるのである。

この年の4月，ゴーリキィの主導による《ズナーニエ》文集第1集が発刊され，そのなかに彼の叙事詩『人間』が発表されると，読書界には異常な反響が捲き起こった。叙事詩にたいする評価は，何よりもまず評者自身と彼の属するグループの政治的思想的立場を明確に物語るものであった。保守派は囂々たる非難をもって，革新派は嘖々たる称讃をもってこの作品を迎えた。そして，そのいずれの側の批評も叙事詩の主人公——大文字で書かれるところの人間のなかに革命の伝導者の姿を見ることにおいて一致し，それゆえにこそたがいに激しい論争をくりひろげたのであった[2]。

この年から《ロシヤの富》の編集者になっていたコロレンコは，同誌の8月号において《ズナーニエ》文集第1集を取り上げ，とりわけゴーリキィの叙事詩について綿密な検討をおこなった。コロレンコの評価は保守対革新の鋭い対立のなかにあって独自の位置を占めるものである。コロレンコは叙事詩の基本的モチーヴを，感情を否定する理性の讃美，「《前へ，より高く》すすみ行く人類の原動力としての思想，もっぱら思想のみの讃歌」として理解した。「感情なき理性は，理性なき感情と同様，等しく意味をなさないものである。一般的にいって，《理性（思想）と感情》のこの古めかしい角逐は，もはや，理性にとっても感情にとっても何ら得るところのない，まったく無価値なものとしてすでに投げすてられるべき時と思われる。」と彼はいう。しかし，ゴーリキィの**人間**は感情一般を否定しているのではない。否定されるのは「古い真理のボロをまとい，偏見の毒に浸され」，思想に敵対する感情であって，「思想とひとつの創造的火焔に溶け合う」ことも可能な積極的役割が感情のなかに認められているのである。**人間**の前進に関しての

(1) 人文研究第24輯，拙稿 c. 33～39.
(2) 「小樽商大創立50周年記念論文集」，拙稿 c. 755～787。『人間』に関する論争については同論文集 c. 759～762。

「人々の前方を，生活より高く」という表現もコロレンコのなかに疑惑を生ぜしめた。それは，コロレンコの理解によれば，集団としての人類と切り離され，現実と隔絶してひとり独善的に力を讃美する孤高の存在を意味するのであった。こうして，かってゴーリキィの文学への登場にあたってニーチェ流の力の讃美者の出現と誤解して彼を祝福した批評界と読者層の一部が，ほかならぬニーチェ主義からの逸脱ゆえに彼を非難しはじめたいま，当初からゴーリキィ文学の本質における革新性と人民性の最もよき理解者であったコロレンコが，ゴーリキィの主人公をゲーテ的人間像に対立するニーチェ的人間像と断定するのである。

コロレンコはこう述べる。「……かってゲーテは語った，《偉大なる人間なるものをわれわれは人類の総和としてのみ是認する》と。」「この表象は深く民主的である。文学が創造した最もすぐれた，最も現実的な，同時にまた最も浪漫的なものはすべて，意識的あるいは無意識的に，この表象の上に立脚する。ゴーリキィ氏自身もまたすぐれた，最も生活的な諸作において，《人類の総和》に加えられるのは光さす頂上に生きる偉大な人々ばかりではないという，このイデーに奉仕しているのだ。底辺にも貧民窟の深奥部にも，集団的人間の偉大な形象を創造するために必要な諸特質がある。リアリスト芸術家の功績は，人間が現われるあらゆる場において，人間を探究するところにある。なかんずくゴーリキィ氏の功績は，ある暗い，彼以前にはかすかにしか知られなかった人生の裏町においてなお人間性の諸特質を彼が発見したところにある。ニーチェの人間，あるいは俗にいわれる《超人》は極度に貴族的かつ退化的把握である。これもまたゴーリキィ氏の創作のなかに入ってきた，彼の諸形象を歪め毀しながら。いまや，われらの作家の抒情的哲学的デッサンのなかで，それは芸術的掩蔽なしに行動する。ゴーリキィ氏の《人間》は——彼の特徴を充分に検証するがよい，——ほかならぬニーチェ的人間である。彼はゆく，《自由に，誇り高く，人々のはるか前方を（つまり人々と一緒にではなく？），生活より高く（生活そのものよりも？），ひとり，

生存の謎のなかを……》」「ゲーテの偉大な人間は人類に生得の自然力との結合のなかに力を汲み取る。ゴーリキィ氏のニーチェ的《超人》はそれを卑しむ。前者は生活そのものであり，後者は幻想にすぎぬ。」[1]（傍点—松本，下線—原著者）

ゴーリキィの**人間**は，たしかに，コロレンコのいう《人類の総和》としての**人間**ではない。それは，ゴーリキィの功績のひとつに数えられる浮浪人たちの個々の積極的特質の積み重ねによって作られたものではない。それは，人々のなかで悪と並存することのできる善への志向の火花の集大成ではなく，人類の前進を妨げ，人類を人間以下のものに転落させようとするもろもろの悪徳の根源にたいして非妥協的な，決定的闘争を挑みかける「反逆の**人間**」である。このことがコロレンコのいうように，孤立的に現実を超絶するニーチェ的《超人》を意味するであろうか。ゴーリキィの**人間**は高らかに宣言する。「おれがこの世に呼ばれたのは，おびえた人たちを，血みどろに反目し合い，たがいに相手を貪り喰うあの動物群に近づけているあらゆる迷妄と誤謬の結び目を解きほぐすためだ！／おれが**思想**によって創り出されたのは，あらゆる古いもの，あらゆる狭く汚ないもの，あらゆる悪しきものをくつがえし，うちこわし，踏みにじり——そして，**思想**によって鍛えられた，自由と美と人類への尊敬の確固たる基礎の上に新しいものを創るためなのだ！／人間的欲求の恥ずべき欠乏の妥協せざる敵であるおれは，人類の各人が**人間**であることを求める！」[2]（傍点—松本）　このように，ゴーリキィの**人間**は人類への愛と期待に貫ぬかれ，人類解放と新生活建設の具体的課題を担っている。それは，第1次革命前夜のロシヤ全土に沸き立つ革命的雰囲気を背景に，人民の巨大な運動の先頭に立つ革命的集団主義者の象徴なのである。この形象こそ「幻想」ではなくて「生活の発展そのもの」であった。

---

(1) В. Г. Короленко. О литературе. М. 1957. с. 359～360.

(2) М. Горький. Собрание сочинений. т. 29. М. 1950. с. 366.（以下同選集は C. c. と略記する）

コロレンコの創作とゴーリキィの初期のリアリスチック系列の短篇小説には，主人公たちの性格づけにおいて，ブルジョア世界に対立する力強い個性の描出において，ヒューマニズムの理念においてすくなからぬ近似性が指摘されるところである。しかし，その後におけるゴーリキィの芸術家として革命者としての厳しい人生求道は，ときにはたがいに矛盾相剋し試行錯誤に迷いつつも，作家のなかに新時代へと導く思想を鍛えあげ，彼をしてコロレンコの立つ世界を大きく乗り超えさせた。コロレンコもまた新時代の息吹きを鋭敏に感じ取っていた。しかし，彼は生涯の最後の日まで80年代の先進的文学の特徴である倫理的ヒューマニズムの見地にとどまったのである。

1905年以降，コロレンコがもっぱらポルタワに定住し，ゴーリキィが長期にわたって外国に滞在したために，二人の間に直接的交際の可能性は失なわれたが，書簡の往復による交際は断続的にではあるがコロレンコの生涯の最後まで続けられた。

ゴーリキィからコロレンコへ		発信地	コロレンコからゴーリキィへ		発信地
			1.	1909年4月15日	(ポルタワ)
			2.	1910年8月19日	(ハートカ)
1.	1910年8月末	(カプリ)	3.	1910年10月28日	(ポルタワ)
2.	1910年11月3もしくは4日	(同上)			
3.	1913年2月11日	(同　上)			
4.	1913年5月23日	(同　上)	4.	1913年6月10日	(ハートカ)
5.	1913年7月11日	(同　上)			
6.	1913年7月15日ごろ(電報)	(同上)			
7.	1915年12月初め	(ペトログラード)			
8.	1915年12月24日	(同　上)			
9.	1916年9月5日	(同　上)	5.	1916年9月18日	(ハートカ)
10.	1916年9月28日	(同　上)	6.	1916年10月14日	(ポルタワ)
			7.	1916年10月18日	(同　上)
11.	1916年10月21もしくは22日	(同上)	8.	1916年11月30日	(同　上)

12. 1917年1月14日　(ペトログラード)　9. 1917年1月19日 (ポルタワ)
13. 1917年1月25日　(同　上)　10. 1917年2月9日 (同　上)
14. 1917年2月後半　(同　上)

このほかにゴーリキィからコロレンコ宛に書かれたものとして，1910年11月のトルストイのヤースナヤ・ポリャーナからの「出奔」と彼の死の通知に接して書かれた長文の，発送されなかった未完の手紙[(1)]，および1917年の2月革命以降文化的諸機関の名において書かれた一連のアッピールを含めなければならない。

上に掲げた往復書簡は執筆の動機によっておよそ5つのグループに分けられる。

1）死刑廃止運動のアッピールに関連して。コロレンコ——2，3，ゴーリキィ——1，2。

2）イワン・フランコ記念文集刊行に関連して。ゴーリキィ——4，5，コロレンコ——4。

3）ユダヤ人問題に関する文集刊行に関連して。ゴーリキィ——7～11，コロレンコ——5～8。

4）《ルーチ》発刊に関連して。ゴーリキィ——12～14，コロレンコ——9，10。

5）その他。

1910年夏，立憲君主党中央機関紙《レーチ》(Речь) は死刑廃止のデモンストレーションを文学者たちに呼びかけた。コロレンコの第2書信は次のように述べている。「次のような理由であなたに書くよう頼まれました。新聞《レーチ》に死刑に関してのコラムを作ろうという思い付きが生まれまし

(1) この手紙は後に断片的覚え書とともに回想記『トルストイ』に収められた。「いまあなたに手紙を出したばかりです——そこへ《トルストイの家出》を報ずる電報がきた。それで，——気持の上ではまだあなたと別れていないが，——もう一度書きます。」(C. c. T. 15) とあるところから，これはゴーリキィの第2信 (1910年11月3もしくは4日) の直後に書き始められたと思われる。

た。若干の（5～6の）できるだけ簡潔な文章（警句，短評，小さい絵）などが予定されています。主唱者たちはトルストイに依頼したし，（私は主唱者でないけれど，私を通じて，このとおり）あなたに依頼しています。ほかにアンドレーエフ，レーピン，それに私です。このほかは誰か知りません，でも上記以外にも誰かいるでしょう。

あなたもご承知でしょうが，私は《レーチ》に協力していません，われわれの雑誌はこれとしばしば論争しています。しかし死刑の問題はわれわれの論争の限界を超えると私は判断します。もしあなたが自分の名前をこのささやかな死刑反対の文学的デモンストレーションに結び付けてくれるなら，私はほんとうに心から嬉しく思います。この問題を揺すぶることは必要にして欠くべからざることです。[1]」コロレンコのヒューマニズムは，本質的に彼に敵対する陣営から出された提案であっても，その意図において正しく些少なりとも人民の権利の拡大に役立ちうるならば，その提案を受け入れなければならなかった。ゴーリキィは異なる態度をとった。彼はコロレンコに答えた。「抗議に参加することはできません。《死刑の問題はわれわれの論争の限界を超える》とあなたは書いておられる。そうです，今日は超えているでしょう，だが――明日は？　われわれの論争はもう一度ならず死闘に変りつつあるのです。そして，私が思うに，今日の抗議の組織者たちは――彼らに権力を与えてごらんなさい！――きわめて熱心に敗者を殺戮するでしょう。すでに今日ゲルシェンゾン氏の一派が銃剣の効能について宣伝するのなら，私は未来を予想できます！……この新聞〔《レーチ》〕には政治があまりに多すぎます，そして新聞は民主主義に唾かけることにあまりに熱心です。[2]」ゴーリキィは《レーチ》が全体として果たしている反革命の役割を重視していた。「銃剣の効能について宣伝する」とゴーリキィが書いているように，1909年に刊行された立憲民主党の文集《ヴェーヒ》（Вехи）に掲載された論

(1) В. Г. Короленко. Собрание сочинений. т. 10. м. 1956. с. 459～460.
(2) С. с. т. 29. с. 128～129.

文のなかで，H. ベルジャーエフ，C. ブルガーコフ，П. ストルーヴェ，M. ゲルシェンゾンらは一致して，ベリンスキィやチェルヌィシェフキィを含む革命的民主主義の伝統，さらには1905年の革命運動を誹謗し，「銃剣と監獄によって」「民衆の害意から」ブルジョアジーを救ったとして政府を讃えた。このような人々の主導のもとに，彼らとともに名を連らねることは，彼らの行動のすべてを是認し，ゴーリキィの名によって彼らの影響が人民各階層へ浸透するのを黙認し，促進させることを意味した。

この問題をめぐって，コロレンコとゴーリキィの間には再度書信が往復した。ゴーリキィの回答のなかにきびしい党派性を見たコロレンコは次のように書き送った。「あなたに書いたあの文学的計画に関しては，あなたの拒絶は当初の予定にとって大きな打撃でしたが，やはりあの試みは構成されつつあることをお伝えしましょう。あなたの見解と気持は理解しますが，同意することはできません。この問題では私は別の見地に立ちます。ひとつの政治的問題の解決の直後に，つい最近の同盟者のなかから敵を作らなければならないような別の諸問題が到来するということ——これはもちろん正しい……私たちは自明の理のために闘かうことを余儀なくされているのです。これらは新しい権利への道を積み重ねるのです。この後では新しい基盤に立って，まったく新しい問題に関して闘いを進める可能性があるからこそ，未来の敵対者との同盟を組むに価いします。それはそれとして，私はここでは自分の気持を述べているのです。私個人としてはいかなる政党にも加わっていませんし，このような状態が文筆家にとって一番都合がいいと考えます。ペンには党の枠の外で働かなければならない場所があります。[1]」（傍点—公本）

《レーチ》誌上の《死刑反対デモンストレーション》は，ゴーリキィばかりでなくレーピンやアンドレーエフの賛成も得られなかったが，トルストイとコロレンコの論文を中心に構成された。コロレンコは，死刑反対の運動を

(1) «А. М. Горький и В. Г. Короленко» М. 1957. с. 61.

《レーチ》の企画に従ってのみ進めていたのではなく，《ロシヤの富》に掲載された一連の論文のなかで，『世態的現象』や『軍事裁判の特徴』のような大きな論文のなかで進めており，この問題に関する関心を社会に喚起しつつあった。このために彼の雑誌は一度ならず発禁もしくは没収処分に遭い，彼自身も裁判にかけられようとしていた。ゴーリキィはこのことをよく知っていた。そして，コロレンコの仕事を高く評価し彼を敬愛するがゆえに，彼の《レーチ》への接近を危懼するのである。「《気持を理解する》という言葉にとても感動させられます。自分の考えを充分に，誤解のないよう正確に形づくる能力をもたないものですから，あなたに乱雑に，ぎごちなく書いたことが気にかかっていました――興奮するといつもこうなのです。それに私はあなたの招請をお断りするのが辛かったのです。しかしながら，《われわれは自明の理のために闘かうことを余儀なくされている》というあなたの言葉に私は反対です，論争のためにではなく，ただ，心が何によって痛むのかを申し上げるために――反対するのです。広汎な民主主義的演壇を新たに創る必要がある――これは自明の理ではないでしようか？　ところが《レーチ》はますます反民主主義的になっています。このことは《現代世界》にたいする攻撃によってばかりでなく指摘されるところです。革命は国内における文化的エネルギーの欠如の結果として失敗に終った――自明の理ですね？しかしイズゴエフその他の類のニヒリストたちが文化的エネルギーの発達と蓄積を促進させ――自分の正しさを，闘争の目的と方法の社会的に明白な自覚を促進させることがはたしてできるでしようか？　露西亜（ルーシ）を西欧小市民風に作り変えることは賢明な志向でしよう。そして，もちろん，時代（とき）がうまい具合にこれにかかずり合っています。しかし，人々が時代にどんなに粗野に，性急に，シニックに手を貸しているかを見るとき，不本意ながら気も狂わんばかりに腹が立つ。ちょいのちょい，ちょい船一丁あがり！　といったいい加減なやり方は古い戦術です。これは人々を団結させないで突き放します。私は独断家ではないと思いますが，党員としての私はあまりよくない党

員です。仲よく《最初から始める》ことの必要性が私にはわかります，そして，みんなが，昔のままに，自分の足踏みしている所で押し合っていることもわかります。」（傍点—松本）この手紙の終りで，ゴーリキィはコロレンコの裁判事件と彼の論文『軍事裁判の特質』に触れて，こう述べている。「新聞が着きました，あなたが裁判にかけられるという記事を読みました——なんという卑劣でしょう！　何のためです。あなたの論文のため？　タブリンのため？　あるいは——全体として？　あなたの論文はイタリヤ語で出版するためにミラノへ送りました。あなたがすぐにもう2，3部送ってくださるといいのですが——イギリス，ドイツ，フランスに送る必要があります。事件が裁判まで行くようなら，抗議を組織なさる気はありませんか？　早急にご返事をください。[1]」事件の直接的原因となったのは，暴動鎮圧のため派遣された懲罰隊の実態を扱ったタヴリンの小説『農奴は生きている』が《ロシヤの富》10月号に掲載されたことにある。10月号は小説の載っている部分だけ削除され，小説の後篇が掲載された11月号は差し押えられ，編集者（コロレンコ）にたいする裁判は成立しなかった。

1913年，ウクライナ出身の文化的活動家の間に，ウクライナのすぐれた作家で社会的活動家であるイワン・フランコの文学生活40年を記念する文集を刊行する企画が生まれた。[2] カプリ島にまだ滞在中であったゴーリキィは，編集者 В. グナチュークの依頼により，自分の短篇小説を文集のために送ると同時に，コロレンコに宛ててこの企画に参加するよう要請した。ゴーリキィはこの手紙のなかで，編集者からの手紙の一節を引用しつつ，こう書いている。「……彼〔グナチューク〕の私宛ての手紙にこういう箇所があります。《亡くなった M. M.〔コツュビンスキィ〕は，В. Г. コロレンコがウク

(1) Там же. с. 62～65.

(2) Франко Иван Яковлевич (1871～1926) を記念する文集は1916年になってようやく出版された。(«Привіт Іванови Франкови в сорокліте його письменської праці 1874～1914. Літературно-науковий сбірник. Львів. 1916») ゴーリキィはこれに短篇 «Лука Чекин» を送った。С. с. т. 14. には «Кража» と改題されて収められている。

ライナ語で書いた仕事をもっていると私に知らせました。彼がその仕事のひとつを送ってくれたら，われわれ一同にとってどんなに嬉しいことでしょう。[1]》」しかし，コロレンコは返信のなかで，1)「少年期と青年期を通じてポーランド語とロシヤ語で話した」が，「ウクライナ語ではいまだかって話したことがない」，2）したがって，編集者が言及しているような仕事はもっていない，3）健康状態が思わしくなく，概して新しいものを書く可能性のうすいことなどを理由に，文集の企画に参加できないと回答している。

これらの手紙にはゴーリキィの帰国についての新聞の報道が触れられているが，事実，ゴーリキィは帰国の予定を立てはじめていた。この年の2月，ロマノフ朝300年にあたり，ツァーリ政府は大幅な記念大赦をおこない，ゴーリキィにたいする8年越しの告訴も取り下げられた。ゴーリキィの同志たち，とりわけレーニンは，信頼できる友であり解放運動にとって貴重な才能である作家が宿痾となった結核に病みつつ充分な療養施設のないロシヤに帰ることに強く反対し，スイスかドイツ南部の「りっぱなサナトリュームで，本腰で療養」するようすすめた。しかし，故国を想う心は，自分の健康をかえりみる余裕をゴーリキィに与えなかった。1913年12月31日，彼は8年ぶりに故国の土を踏んだ。

ゴーリキィの帰国はツァーリ政府にはただちに作家の周辺に監視網を張りめぐらす緊張を与え，解放運動の陣営には熱烈な歓迎と期待とをよび起こした。ボリシェヴィキーの新聞《プロレタルスカヤ・プラウダ》は次のように述べる。「ゴーリキィのような，かくも人民的な，人民の深奥部から出て，その才能を人民の生活と希求の描出に捧げた作家が故国の土と切り離されて，どんなに深く重苦しく悩まなければならなかったか，理解に難くはない。しかし，病気も，故国との距離と故国を思う憂愁も《海燕》の歌い手の誇らかな魂をくじきはしなかった。……われわれは親愛な作家の帰国を歓迎する。ふるさとの大地をして彼の体力の回復に役立たせしめよ，彼のなかに

(1) C. c. т. 29. c. 306.

新しい創造の力を奮い立たせしめよ。[1]」

帰国後のゴーリキィは以前にもまして精力的な，多面的な活動を展開した。彼は《プロレタルスカヤ・プラウダ》や雑誌《啓蒙》(Просвещение) に協力し，『プロレタリヤ作家集』と雑誌《年代誌》(Летопись) の創刊を主宰し，いくつかの民主的文化運動の団体の創設を指導した。そして，このような多忙をきわめた生活のうちに，『幼年時代』につづく中篇小説『人々のなか』や『ルーシについて』の一連の短篇など，ゴーリキィ創作の最高峯に数えられる作品が書きすすめられていった。翌1914年，第一次世界大戦が勃発した。ロシヤは政府と反動派の喧伝する排外的愛国主義に塗りつぶされようとしていた。かっては民衆の側で生き，ゴーリキィと同じ陣営に立った人々までがすくなからずショーヴィズムの熱狂に飲みこまれていった。こうした風潮にゴーリキィは真向から反対し，交戦各国の人民による国際的連帯を呼びかける必要を痛感した。帝国主義戦争にたいするゴーリキィの基本的態度は次のように表明されている。「戦争は狂気だ，人々の貪慾にたいする天罰だ。周知のように，貪慾なのは人民ではない，戦争を企らむのは種族ではない。ドイツの農民は，まさしくロシヤの農民と同様，植民地政策に加わっていないし，アフリカをいかに有利に分割すべきかなどとは考えない。[2]」

彼の反戦活動はコロレンコの活動と結びつく。

1915年12月初め，大戦の激化とともに「シオン同盟の世界征服計画」の噂がまことしやかにささやかれ，ショーヴィニストたちによって反ユダヤ運動が展開されたとき，ゴーリキィはコロレンコに手紙を送った。「《ロシヤ・ユダヤ人生活研究協会》は，《露西亜(ルーシ)におけるユダヤ人》という共通表題のもとに歴史および文学作品の文集の刊行を予定しつつ，謹んであなたに提案いたします。あなたの労作によって美文学部門に参加していただけないでし

(1) «Пролетарская правда». No. 5. 1914. В кн. «Летопись жизни и творчества А. М. Горького». вып. 2. М. 1958. с. 399.
(2) С. с. т. 24. с. 124.

ょうか。ロシヤにおけるユダヤ人の生活にたいするあなたの観察の結果をロシヤの読者に分けてくだされば幸いです。[1]」さらに12月26日，「お願いです——私のしつっこさをご寛容ください，しかし，文集《ルーシにおけるユダヤ人》にあなたの参加を仰ぐことは絶対不可欠のこととみんなが考えているのです，そして《ユダヤ人生活研究協会》編集局は文集参加のお願いによって今一度あなたをお騒がせするよう私に依頼しました。この仕事へあなたが参加されることは私個人にとっても道徳的に必要であること，もちろんです。そういうわけで，このとおり私は熱心にあなたにお願いするのです。もしもあなたが文集のために新しいものを書くことができないのでしたら，《ロシヤの手記》のためにお書きになったものを転載させていただけませんか。[2]」さらに翌年の9月5日，「《ロシヤ・ユダヤ人生活研究協会》はあなたに，《ロシヤ通報》に掲載されたクジとマリアンポリについての論文*を単行本で出版するのをお許しいただきたくお願いいたします。われわれはこの論文を数万部印刷することを企画しています。ユダヤ人にたいする新しい中傷との闘いの事業においてきわめて重大な意義をきっともつでしょう——われわれはきっともつであろうと確信します。さらにこの論文を，印刷準備中の文集《楯》第4号にも転載することをお許しください。[3]」

前の2通にたいするコロレンコの返信の所在は明らかでないが，第3信にたいしてコロレンコは9月18日付の手紙で次のように答えている。「《マリアンポリの反逆》についての私の論文を出版することによろこんで同意します。ただ，後でわかった〔事件の〕証拠のためにちょっとした訂正と補足を

(1) «Гор. и Кор.» с. 72.
(2) С. с. т. 29. с. 247.
* «Русские записки» No. 200 (1916, 8, 30) に掲載されたコロレンコの論文 «О Мариампольской измене» をさす。この論文は г. Мариамполь と Свалск губ. の Кужи のユダヤ人にたいする軍事裁判を扱ったものである。1814年9月にこの地域がドイツ軍に占領されたとき，ユダヤ人がドイツ軍を手引きしたという嫌疑を受け反逆罪に問われたのであった。
(3) С с. т. 29. с. 366.

しなければならないので，ほんのすこしばかり時間をください。たいしたことではないのですが，その前に急ぎの仕事をひとつ片付けるだけで，すぐ着手します。あなたとほとんど同時に《ユダヤ人に関する正しい知識を普及する会》の代表者が手紙をよこして同じ趣旨の提案をしています。……こちらにも許可を与えることにあなたは別に反対なさらないでしょうね？　しかし，私のほうはあなたの返事次第です。[1]」

ゴーリキィの関係する《協会》はペトログラードで，《普及する会》はユダヤ人を中心にモスクワで組織されていた。コロレンコの論文の出版の問題をめぐって両者の間で交渉が行なわれ，最初は難行したが，やがて《協会》は単行本，《普及する会》は数人の手になる論文集という出版形態の違いが明らかとなり，著者によって訂正を加えられた論文は両者に渡された。この交渉の推移に関連して，9月から11月にかけてゴーリキィとコロレンコの間にはひんぱんな手紙の往復があった。これらの書簡には，敗戦につぐ敗戦と，ラスプーチンが「権威」をふるう政府内部の政治の不在によって，破局的様相を露呈しはじめた首都の生活の混乱がゴーリキィによって描き出されている。戦争と腐敗政治がもたらした人々の混乱，狂燥，道徳低下，そしてこうしたなかで新たに開始された反動の攻勢は，ゴーリキィの心を黒い霧にとざされたように暗胆たらしめる。「おととい，ヴィボルグ地区で騒擾が起こった。警察は発砲した，数人負傷した，兵士に負傷させられた警官もいる。用心ぶかい人々は一番近い休日を怖れてフィンランドに出かけてしまうというのが一般の気分です。」「私はナショナリストでないし，ましてやショーヴィニストではない，しかしながら――人々が自分の国にたいしてこんなにも冷淡で無関心でいるのを見ると，空怖ろしくなるのです。空怖ろしい。ときどきこう考えるほどです，――《強大な》大ロシヤの国民性がとことんまですたりきったのではないだろうか？　と。この考えは笑われるかも知れません，でもこのことがしばしば，ますます執拗に私の頭をどやしつけるのです。わ

(1) «Гор. и Кор.». с. 74.

れわれのところはとても悪くなってます。ウラヂーミル・ガラクチオーノヴィチ，とても！　しかも到るところで。私はありとあらゆる公衆を知っています——労働者，知識人，コノヴァーロフや他の活動家，将軍や兵卒。私は生涯かけて人々のなかに立派な，強壮な感情を探り求め，そして見い出しました，それらは私が考え出したのだと言われてはいるけれど。ないものは——考え出せません。だが，今このときに，強壮な人々を私は見ることができない，発見できない，どこにも見当らないのです。」「《砂漠に——ああ！——無人ではない砂漠に》暮らすと，自分を《ロシヤの》ロビンソンに感ずるでしょう——金曜日の七日目ごとに一週間を，そして相も変らずの嫌らしい金曜日を心に刻むロビンソンに！[1]」ゴーリキィの心は祖国と人民の未来を憂える思念に揺れ動いていた。だが，コロレンコは，20数年前と同じように，時代の喧騒のなかで静かに沈着に時代の流れを洞察しようという姿勢を保っていた。11月30日付の書簡で彼はゴーリキィに書いた。「あなたのペシミズムについてですが……私は今でもペシミストではない。病気の時にいろいろ考えてみました，ペシミスチックなものを含めて——自分のことを。だが，私には世界が青春と同じものと思われるのです。つまり薄明と闇，善と悪の混合として。この多様性を透して光と思われるものを判別する力が必要です。この力は私のもとには充分でないかも知れないが，世界には充分あります。30年戦争の混沌からヨーロッパはやはり宗教改革を結晶させていった。今も何かを結晶させつつあります。暗黒と滅亡は多い，しかし，光もまた暗黒と同じく現実であり，生は死に劣らず現実です。私のところでは戦争の2週間ほど前に孫娘が生まれました。大きくなったら，彼女にとって戦争は過去のもの，歴史になるでしょう，彼女は戦争のことを本で読み，そのとき言うでしょう——すると私はちようどこの時代に生まれたんだわ，と。そして，そのときにはまた自分の喜びと悲しみがあるのでしょう。[2]」

(1) Там же. с. 82～83.
(2) Там же. с. 84—85.

70年代の人民主義運動の絶頂期に青春を迎えたコロレンコはこの運動に加わって大学を追われ，さらに10年の長きにわたって流刑地での辛苦の生活を余儀なくされた。その間に彼は，多くの同志たちが弾圧に屈服して転向する姿を，かっての「果敢な，才能のある」同志たちが，果敢で有能であればあるほど，転向においてもいっそう醜悪に崩れ，活動の単なる停止にとどまらず，露骨な，有害な人民の敵対者にまで転落してゆく姿をしばしば見なければならなかった。「組織と人間」の相剋を露ほどにも感ずることなくただひたすらに権力への渇望に酔っていたか，あるいは相剋に引きさかれたままその結び目を探り求める意慾すらも失なった，かっての「輝やける」組織者たちが，組織者としての経歴に足を踏み入れたがゆえに，しばしば転向において，当初の理念とまさしく正反対の理念において組織者たらんと狂奔し，かっての同志をたがいに中傷せずにおれない姿は悲惨である。ここから引き出された教訓が，コロレンコをして「党の枠の外」に立たせ，目前に激しく移り変る政治的社会的動向や解放運動内部にしばしば生ずる軋轢に囚われることなく，ひたすら未来を信じ，すばらしい未来を呼び招く土台として役立つであろう日々の，地味ではあるが欠くことのできない仕事の積み重ねをたえまなく押し進める道を選ばせたのであった。

ゴーリキィは，コロレンコの生き方もまた誠実な人間の生き方として深く尊敬しながら，彼自身としては別の道を選ばなければならなかった。人民の深奥部に生い育ち，貧困と抑圧がいかに人々の関係のなかに無目的な敵意と憎悪とを煽り人々から人間らしさを奪い取るかを体験し，民衆とインテリゲンツィヤの深い断層を彼自身の内部において知覚し，一度は生に絶望する非情な青春を彼は経験した。この時期の彼に人生の意義を教え闘いの方向を与えたのは，組織の壊滅的敗北の時代にもなお人民主義の根本の理念——専制の打倒と人民の国の樹立——を心の灯として守りつづけながら，報酬を期待することなく，人民大衆とともに暮らしながらその教育と生活改善のために生涯をかけた人々であり，人間を利己的に切り離す沈滞の時代に，人々のよ

き志向を結び合わせる道を模索しつつ，やがて90年代に捲き起こる人民自身による大衆的解放運動を背景に新しい組織の結成を，社会民主労働党の創立を準備した人々であった。解放運動はゴーリキィのなかで彼自身の魂にこびりつく悲惨な過去からの解放と深くかかわり合っていた。1910年代から20年代初めにかけてのロシヤ史最大の激動期に，そしてこれはゴーリキィにとって40才代から50才代にかけての芸術家の才能の全面的満開の時期にあたるのだが，ゴーリキィの芸術創作の主たる関心が自伝三部作をはじめ連作『ルーシについて』や「インテリゲンツィヤのなかで」の構想における自伝的系列の諸短篇小説に向けられたのは故ないわけではない。政治とのかかわりあいが深くなればなるほど，ゴーリキィはいっそう厳しく自分の内面との対決へと立ち向かわなければなかった。ゴーリキィは一度ならず語っている，「私はよくない党員です。」「私はよくないマルキシストです。」と。この言葉は政治的人間としての自己の側面にたいする偽りのない評価であろう。彼の本質はあくまでも芸術に生きる人間であった。しかし彼は人々が政治のために苦しんでいる時代に冷徹な観察者の位置にとどまることはできなかった。人間を愛し人間に執着する芸術家であるゆえに，ゴーリキィは人間の生活条件を規定する政治にもまた執着し，人間に新しい生活の創造を約束する政治的実践に参加せずにはいられなかった。

1916年の10月に発生したペトログラードの工場ストライキは市内およびその周辺に拡大して，ストの人員は18万2千に達し，さらにモスクワに波及し，ドネツ，ウラル，ニージニイ・ノヴゴロドなど14県を包みこんだ。これは事実として1917年の革命の始まりを告げるものであったが，開戦以来戦争反対を一貫して主張する唯一の政党であったロシヤ社会民主労働党（ボリシェヴィキー）は中央委員会のほとんどを開戦当初の大量検挙によって監獄と流刑地に奪い去られ，わずかに残された2人だけの中央委員会（レーニンとジノヴィエフ）のはるかな亡命地からの指導によっては目まぐるしく変貌する国内の政治情勢に瞬時に対応する戦術を樹立することが困難とな

っていた。さらに党員のほとんどが間断ない弾圧のもとに地下活動を余儀なくされ，ゴーリキィと党指導部との連絡は断たれていた。工場閉鎖，輸送機関の杜絶，食糧危機，そして労働者は軍隊と警察の銃撃のもとにさらされている。社会不安の増大は支配者を混乱させると同時に，人民の生活をも危機に追いやらずにいない。なにかをしなければならなかった，しかしこの混沌を収拾し，2月革命への道を具体的に照らし出してくれる人はロシヤにはいなかった。「強壮な人々はどこにもいない」というゴーリキィの嘆声は完全に正しいとはいえないにしても，けっして誇張ではなかった。ゴーリキィの「ペシミズム」は民衆の苦しみを真剣に憂え，それを直接的に反映するゆえの「ペシミズム」であった。ゴーリキィは目前にあるロシヤ生活の危機を，やがて書物に書かれるであろう歴史の1ページとして傍観していることはできなかった。正しい解決の道を示すであろう人の到来を手を拱いて待つことはできなかった。「砂漠」脱出を試みないわけにはいかなかった。

1917年1月14日，ゴーリキィはコロレンコに手紙を送って，近く創刊を予定されている新しい出版事業について知らせ，この新聞《光》(Луч)に協力するよう呼びかけた。「新聞の傾向は急進的民主主義，目的は立憲民主党の左から社会主義諸政党の右にある全グループの社会的政治的関心に奉仕。将来においてこの新聞は急進的民主主義政党の創立を展望しています，その綱領もすでに作成されました。」「私個人としても，私の同僚の代理としても，私はあなたの協力を切にお願いします——賛成してください，В. Г.！新聞は節度のある，そしてこの暗黒の日々に欠くべからざるものです。」「もしも急進的民主主義党の綱領に興味をもたれるなら，——言ってください，送りましょう。」[1]（傍点—松本）新聞刊行の企画は結局流産に終ったが，この問題に関連してゴーリキィとコロレンコの間には2月革命の直前まで手紙の往復があった。コロレンコは新聞刊行の意義に賛意を示しながら，しかし彼は《ロシ

(1) Там же. с. 86.

ヤの手記》の編集の仕事や，古くから関係をもっている幾つかの雑誌の仕事に忙殺されている状態にあり，したがって，かりに新聞協力者として名前を連ねてもそれは「仮構」にすぎず，新聞にとっても彼自身にとっても良心に悖る結果を生ずるであろうことを理由にゴーリキィの呼びかけを拒絶した。政党結成の問題に触れて，彼は書いている。「一般的に考えていうのですが，われわれは党派的戦術的綱領による結びつきではなく，急進的インテリゲンツィヤとよばれる人々，その世界観，その志向の反映に役立つであろうところの機関を大いに必要とします。これは独得な，いちぢるしい比重を有する社会層です。[1]」「はたして現在民主的機関にとって一般に社会主義と境界を仕切ることができるでしょうか。そんなことは必要ありますまい。しかし，新聞がこまごました，つまらぬ党派争いに落ちこむことがすくなければすくないほど，もちろん，そのほうがいいですね。[2]」（傍点—松本）

この頃，革命中核の組織化が秘かに準備されつつあったのだが，それはゴーリキィの眼のとどかぬ社会生活の地層の下においてであった。現実に存在する生活の混沌を収拾すべき任務は，「政治的に文盲で，社会的に無教育な住民の幾千万大衆のなかに生きる[3]」少数の良心的な啓蒙されたインテリゲンツィヤの肩にかかっているとゴーリキィには思われた。国民生活全体が危機に瀕しているときこそ，社会の思索し教養ある部分たるインテリゲンツィヤが総力を結集しなければならない——こうゴーリキィは考えた。ゴーリキィのこのような見解は2月革命ののちでも変ることなく，当面の戦術においてもボリシェヴィキーといちぢるしく喰い違って，レーニンの厳しい批判を浴びなければならなかった。

チューリッヒの新聞に，ゴーリキィが臨時政府とソヴェト執行委員会にた

(1) Там же. с. 87.
(2) В. Г. Короленко. Соб. соч. т. 10. с. 554.
(3) «Летопись» No. 2, 3, 4. Птг. 1917. М. Горький. «Письма к читателю». В кн. Груздева «М. Горький». с. 221.

いして即時講和をよびかける手紙を送ったことが報じられたとき[1]，レーニンは次のようにゴーリキィを批判した。

「……初めから終りまで，月並な，凡俗な偏見の漂うこの手紙を読めば，苦い思いを味わうだろう。筆者は，カプリ島でゴーリキィと会ったさい，彼に警告し，彼の政治的誤謬を叱責したことがある。ゴーリキィはこの叱責を，あの誰にも真似のできない，愛らしい微笑で受け止め，率直に言明したものだ。《私がよくないマルキシストであることは知っています。それにわれわれ芸術家はみな責任能力のない人間です。》これに反論するのは容易でない。

ゴーリキィが全世界のプロレタリアートの運動に多くの利益をもたらしたし，もたらしつつある巨大な芸術的才幹であることは疑いない。

しかしゴーリキィがなんのために政治に首をつっこむのか？

私の見解では，ゴーリキィの手紙はプチ・ブルジョアジーばかりでなく，その影響下にある労働者の部分に流布されている偏見を表わすものである。わが党の力のすべて，意識的労働者の努力のすべてが，この偏見との執拗な，ねばり強い，全面的闘争に向けられなければならない。ツァーリ政府は目下の，当面の，**帝國主義**としての戦争を，掠奪的強盗的戦争を劣弱な諸民族を掠奪し抑圧するために始め，継続させてきた。グチコフとミリューコフたちの政府は，**ほかならぬ正にそのような**戦争を継続することを余儀なくされ，そして継続することを欲するところの，地主と資本家の政府である。この政府にたいして民主的平和締結の提案をもって向かうことは——娼家の亭主に純潔の説教をもって向かうに等しい[2]。」

---

(1) 後になって И. А. Груздев に宛てた手紙（1933年4月13日付）で，ゴーリキィはこの報道にある事実を否定し，「おそらく，外国の新聞社が考え出したことだろう」と書いた（C. c. т. 30. c. 303）。しかし，この時期にゴーリキィがレーニンとちがう見地に立ち，ボリシェヴィキーとは別に独自の平和運動をおこなったことは事実である。

(2) В. И. Ленин. Сочинения, изд. 4-е. М. т. 23. «Письма из далека». с. 325.

『いかにして平和を獲得するか？』と題されたこの論文で，レーニンは，ブルジョアの臨時政府が結びうる講和は帝国主義強化のための講和以外にはありえない，プロレタリアートと貧農のみが，政権を手中にしたとき「実際に民主的な，実際に名誉ある平和」を獲得できると主張した。レーニンの見解の正しさは歴史が証明している。しかし，ゴーリキィの前には，嵐の到来に嬉々として羽ばたく英雄的な人々ばかりでなく，飢餓に苦しみ生活苦に号泣する小さな人々の群があった。コロレンコ宛の手紙に引用されている戦場からの通信には，命令系統の混乱のために，ロシヤの兵士たちが戦場で無意味に殺されている姿が描かれていた。即時の講和がたとえ臨時政府の余脈をどれほどか永らえさせるに役立つとしても，この平和は，平時における労働者農民にほかならぬロシヤの，ドイツの，フランスの，交戦国すべての兵士大衆の生命を救うであろう，いや，救わねばならぬ——この世で最も価値あるもの，それは人間の生命そのものだから，とゴーリキィは考える。大革命期全体を通じて彼が一度ならず犯したといわれる政治的誤謬も，ゴーリキィにあっては，政治的組織的人間としての死を意味する決定的誤謬をもあえて辞さなかったところの，芸術的人間としての，倫理的人間としての人類解放の事業にたいするその誠実さと情熱に由来する偉大な迷いであったといわなければならない。(1)

7

10月社会主義大革命につづく国内戦がようやく終熄に近づいた1921年12月25日，永く病床にあったコロレンコの生命が消えた。

ペトログラードで開催されていた第9回全露ソヴェト大会は，議事を中断

(1) ゴーリキィの政治的誤謬が Богданов なり Луначарский なりの影響によるという一般に流布している見解に私は組みし得ない。ゴーリキィの誤謬は彼の本質から発するものであり，誤謬そのものとその克服の過程もまた彼の思想と芸術の発達にとって重要な素因として役立っていると私は考える。この問題については別の機会に取り上げたいと思う。

して，正義とヒューマニズムの作家の死を悼んで黙禱を捧げた。議長カリーニンはポルタワ市に次のような弔電を送った。「全露中央執行委員会議長は全露ソヴェト大会の名により故 B. Г. コロレンコの遺族に次のよう伝えてくれるよう依頼します。意識的労働者と農民のすべては深い悲しみをもって高潔な友であり抑圧された者の擁護者であるウラヂーミル・ガラクチオーノヴィチ・コロレンコの逝去を知りました。ソヴェト権力は共和国の勤労者のあいだに故人の著作が広汎に普及するようあらゆる措置を講ずるでありましょう。」[(1)]

コロレンコの葬儀は，ウクライナ共和国の人民委員とポルタワ市民全体の参加による市民葬として盛大におこなわれた。

この年の夏から，ゴーリキィは肺患悪化のためソレントで療養をつづけていたが，コロレンコの死後，故人の夫人および2人の娘と文通し，コロレンコの遺稿や日記，書簡集の出版に助言と協力を与えた。ゴーリキィがコロレンコの遺族に宛てた手紙は全部で9通あるが，それらのなかで彼は次のように書いている。「私は彼（コロレンコ）にたいしてゆるぎない信頼の気持ちをもちました。私は数多くの文学者と友達になりましたが，B. Г. と会った最初のときから彼が私のなかによび起こしたほどの尊敬の気持ちを，誰ひとりとして起こさせることはできなかった。彼は私の師であった，ながい期間ではないが師であった。そしてこのことは今日に至っても私の誇りとするところです。」[(2)] また，コロレンコの書簡集に触れて，「B. Г. のこれらの書簡はさらにいっそう，あなたの肉親である人がどんなに対人関係において正しく剛毅であったか，あの頃，彼がどんなに人々に注意ぶかく接したかを見事に示すものです――精神の美しさと堅固さにおいて稀に見る人です。」「美的感情と正義の観念の不撓不屈の鼓吹者として，B. Г. は Л. Н. トルストイよりも積極的で，生活に近く立っていました。芸術家としての彼については，

(1) Г. Мирнов. «Короленко». М. 1962. с. 357～358.
(2) С. с. т. 29. с. 444.

お伽話のお話小僧ででもなければ，彼の天才にふさわしいほどには誰も書けません。[1]」ここでは，ゴーリキィはコロレンコの芸術について語るのを差し控えているが，おそらく，その芸術の最も完全な，最も深い評価の栄誉はゴーリキィに属するものであろう。

コロレンコの創作のなかに，ゴーリキィはまず第一にロシヤ文学のもっとも良き伝統の継承を見た。すでに1910年，ゴーリキィは次のように書いた。「グレープ・ウスペンスキィ，ガルシン，サルツィコフについて，ゲルツェンについて読みなさい，現に生きているコロレンコに注目しなさい——今われわれのところで第一級の，最も才能ある彼に。[2]」彼は19世紀ロシヤ文学の民主主義的傾向との直接的関連を指摘した。コロレンコの意義をゴーリキィは，人民生活の正確な描写に，大衆の抑圧にたいする闘いの熱烈な共感に，官憲の専横との不屈の闘いに見た。ゴーリキィはまた90年代末から20世紀初頭に氾濫したシンボリズム，デカダン主義の芸術との闘いにおけるコロレンコの役割を強調している。コロレンコの文学に「古い思想と古い手法」という嘲罵を投げつけるブルジョア批評を反駁して，ゴーリキィは書いた。「わが文学の頭領たる地位を占める能力のある唯一の作家 B. Г. コロレンコの影から進み出なければならない……彼は，その市民的性格の社会貢献については言わないまでも，現に第一級の作家である。……概して今すぐコロレンコについての立派な論文が，社会的にも，文学的にも必要である。[3]」

コロレンコがゴーリキィの初期の習作のなかに新しい芸術手法の萠芽を認めたとすれば，ゴーリキィは，コロレンコの作品のなかにすでに完成された「人民描写の新しい手法」を，先入主に囚われた人民派の農村描写とはっきり対置されるそれを見た。とりわけ彼は短篇『河は戯むれる』を高く評価し，この作品に登場する百姓チューリンについてこう書いた。「……90年

(1) Там же. 422.
(2) Там же. с. 148.
(3) Там же. с. 143.

代になってはじめてB. Г. コロレンコが偉大な芸術家のやさしい，しかし力強い手で百姓を，実際にその全容において，誠実に正しく描きヴェトルーガ郡の百姓チューリンにおいて民族的典型の正しい輪郭を与えた，それこそまさに民族的典型である。なぜなら，それはわれわれにミーニンたちをも，彼に似たすべての一時の英雄たちをも，またロシヤ史全体とその奇妙な中絶をも理解させてくれるからである。[1]」この形象の出現によって，貴族の文学とナロードニキの文学が作りだした農民の「きわめて望ましいが，しかし実在せぬものの諸形象」はすべて記憶のなかから消失してしまう，とゴーリキィは述べている。

コロレンコから彼の最後の，未完結の大作『わが同時代人の歴史』第1巻を贈られたとき，ゴーリキィはこの作品について次のように書いた。「1ページごとに，多く思索し，多く体験した大きな心の人間的な微笑が感じられる。」「私はこのすばらしい書を手にし，もう一度読みかえした。そして，しばしば読むだろう。この作品は真摯な音調によっても，現代文学のあまり知らない，この控え目な充実によっても，いっそう私の気に入った。声は低い，しかし優しく，重味があって，正真正銘の人間の声である。[2]」

ゴーリキィはコロレンコとの交友に捧げた3つの芸術的回想を書いている。『B. Г. コロレンコの思い出より』（1918年），『コロレンコ時代』（1922年），『B. Г. コロレンコ』（1922年）。これらは数多いゴーリキィの芸術的回想記のなかでも，トルストイやチェーホフについての回想と並ぶ珠玉の名篇である。

ゴーリキィは書いた，――「コロレンコは感情と理性とが諧調して入り交り，深い宗教的熱情にまで高まって行くあの稀に見る純粋な緊張を抱いて正義の仕事を自己に課した。彼はわれわれのよき願望と同じく，正義とは明確な形に具象化することを探求している人間の魂によって創りだされた幻でこ

(1) C. c. т. 24. c. 52.
(2) C. c. т. 29. c. 136～137.

とを見，感じているかのようであった。

彼は芸術家の才能を犠牲にして自己の精力を，幻想的なロシヤの生活に培われた百の頭をもつ怪物にたいする間断ない倦まざる闘争に捧げた。

革命的思想，革命的事業の荒々しい形態は彼の心を——義と正義を熱情的に愛し，単一の完璧のなかにそれらの融合を探し求めた人間の心を乱し苦しめた。しかし彼は祖国の創造力の遠からぬ開花を信じていた，そして死から甦生する民衆の奇蹟は恐るべき奇蹟であろうことを予感していた。[1]」（傍点—松本）

これらの言葉は，コロレンコを最もよく知る人の言葉であると同時に，ゴーリキィその人についても語られて然るべき言葉である。（完）

あとがき。　この覚え書の第1回を発表してからすでに4年を経過した。当時私は〈M. Горький. Собрание сочинений в 30-ти томах〉，〈В. Г. Короленко. Собрание сочинений в 10-ти томах〉および若干の研究書に拠ってこの仕事を始めたのであるが，その後〈Летопись жизни и творчества А. М. Горького. вып. 1～4〉をはじめ，私の知らなかった事実（ファクト）を証明もしくは暗示するすくなからぬ資料，研究書を入手でき，また未公刊の若干の資料にも接する機会をもったことから，当初の計画は大きく変更され，とりわけ，作品の比較・検討は全面的に削除しなければならなかった。これらの資料はこの稿においては充分に活用しきれなかつたが，それは私の前に果たしえなかった，あるいは新たに提起されたいくつかの課題を据える。次の機会から，稿を改めてこれらの課題に応えていきたい。

(1) С. с. т. 15. с. 62.